

1. 会長挨拶
2. オンラインジャーナルの発刊について
3. 2025 年度全国大会のお知らせ
4. 2025 年度総会のお知らせ
5. 懇親会のお知らせ

会長挨拶

岩永 弘人

今年は夏の始まりが早く、不意をつかれた感じがしました。その後ずっと暑い日が続いていますが、会員の皆様、お元気でお過ごしでしょうか。(前回、前々回とごあいさつが「老人のぼやき」になってしまったので、最後くらいはちゃんとしたものを残したいと思います。)

最近一番気になっているのは、自分の研究への態度についてです。研究の緻密さと自分に対するチェック機能の甘さ、とでも言うのでしょうか。現職であった頃も、もともと詰めが甘い性格ではありましたが、最近ますます酷くなっている気がするのです。論文を書いても、年齢的には「えらい」(関西弁の「えらい」ではなく「偉い」の方ですが、前者の意味も含めて！)「先生」という理由であまり批判されなくなり、また今更業績を残す必要がなくなった事も関係しているのかもしれませんが。

一方で、全く逆の事も頭をよぎります。昔の先生方は皆厳しかった！私の先生もそうでした。今なら「不適切」で、コンプラに引っかかったであろうような言葉が、教室で普通に飛び交っておりました。特に私の先生は文学を1つの「道」のように考えておられ「お前の論文は、シャーベットみたいに甘い！」と、いつもゼミ帰りの飲み屋でさんざん批判されたものです。たしかに今自分で考えてもその甘さは否定できませんし、今でもそうであると認めざるをえない部分もあります。その後先生から解放(?)されても、その頃の経験は PTSD (オーバー?) のように心身に残り、今に至ります。そのせいか反動で学生には「文学」は、ホントは「文楽(がく)」と書くべきで、楽しいもんだよね。お人形と間違えるから「文学」と呼んではいけないけれど。それでも正しい学問名としては「文学学」と呼ばなきゃいけないよね」などと話します。(ちょうど「音楽」に「音楽学」があるように。)

ですが「文学研究」となるとそうはいかないのでしょうか。他人の意見と自分の意見をちゃんと分け、自分の意見の根拠を示さなければならない。論文の場合はそのフォーマットも守らねばならないし。その「厳しさ」が自分に欠けているなあと最近痛感するのです。これも「老い」なのでしょうけれど、研究に関してはまだ引退したくないので、膝関節の痛みに抗うように、この悪癖にも抗わねばと思っている日々です。

会長としてご挨拶するのは、これで最後となります。やはり向いていなかった、というのが正直な感想です。次期会長にバトンタッチすると、さらに私の無能さが際立つかと思いますが、それでも事務局、編集委員、そして会員の皆様のご協力のおかげで何とかやってこれました。感謝の言葉で、ご挨拶を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

オンラインジャーナルの発刊について

岩永 弘人

十七世紀英文学会で懸案になっておりました「オンラインジャーナル」について、9月の総会で議論するためのたたき台として、この文章を書いております。

まずはこれまでの経緯です。昨年2024年9月の総会に於いて「日本学術会議協力学術研究団体」（以下、学術会議）に登録をするという事を目的に、なるべく簡便な形での「学術に関する機関紙」（以下、機関紙）としてオンラインジャーナルを発刊してはどうか、というご提案をいたしました。しかし、同総会ではまだオンラインジャーナルについての議論がまだ熟しておらず、本件については継続審議となりました。その後、本件についてのワーキンググループを立ち上げZoom等で議論していたところですが、実はこの9月で会長、事務局交代となります。そこで、次期会長として内定いたしております立命館大学の竹村はるみ先生と連絡を取り、前もってこの件についてご相談をさせていただきました。（実は、竹村先生は、所用で9月の総会をご欠席されるという事もあり、すこしフライングぎみではありますがこのような段取りを取らせていただきました。）

竹村先生のお答えは明確で、オンラインジャーナルではなく、簡単な紙媒体の小冊子を代案としてお考えとの事でした。イメージは「関西シェイクスピア研究会」が毎年発行されている「会報」に類似したものという事です。各執筆者が例会の発表内容をB5版1ページにまとめて編集担当者に提出、編集担当者は目次や編集後記を加えて版下を作成するというシンプルな形式です。文責は原則自己責任、配布は全国大会の際に（主催者の許可を取った上で）受付のテーブルなどに置いておくというもの。具体的な経費については、参考値ではありますが、データを作って印刷業者依頼で15ページ、260部、5万円という実績があります。

このようなお話を伺い、現ワーキンググループで再度議論し、来る総会では以下のようなご提案をしようと決断いたしました。「学術会議メンバーを目指すために、オンラインジャーナルは一旦諦めて、冊子体の簡単な小冊子を「機関紙」とする。」（第1案）つきましては、この件について総会にて会員の皆さまのご意見を頂戴し、可能であれば議決まで持っていきたいと考えています。もちろん「学術会議への参加要件（機関紙）に関しては、すべて次期執行部に一任する」（第2案）という議決の仕方もあるかと存じます。そちらの考え方も含めて、ご議論いただければと考えております。

最後になりますが、この件について（1）ハガキでアンケートを実施したこと、（2）昨年の総会において皆様のお時間を長時間頂戴致しましたこと、につきましては現会長の私より、お詫びを申しあげたいと存じます。

それは、当日のご議論よろしくお願い申し上げます。

2025 年度全国大会（第 14 回）および総会のお知らせ

全国大会および総会を東北福祉大学 仙台駅東口キャンパスにて開催いたします。

日時：2025 年 9 月 14 日（日） 14 時 00 分～17 時 00 分

場所：東北福祉大学 仙台駅東口キャンパス 7 階 71 教室 (<https://www.tfu.ac.jp/tushin/access/>)

全国大会（第 14 回）プログラム

【開会のあいさつ（14:00～14:05）】

会長：岩永 弘人

【研究発表（14:05～16:15）】

1. 14:05～14:45

司会：川田 潤（東北支部）

『メアリ・ロウスの描き方：視覚的表現を通した世界観の形成』

青木 愛美

2. 14:50～15:30

司会：伊澤 高志（東京支部）

サタンの声は誰のものか —— 『失樂園』における語りの拡散と消失

松村 祐香里

3. 15:35～16:15

司会：西野 友一朗（関西支部）

シェイクスピアのソネット集とベン・ジョンソンの『エピソード』における沈黙

藤澤 博康

【閉会のあいさつ（16:15～16:20）】

事務局長：金崎 八重

研究発表要旨

『メアリ・ロウスの描き方：視覚的表現を通した世界観の形成』

青木 愛美（東北支部）

17 世紀イングランドの女性詩人メアリ・ロウス（Mary Wroth）の作品には、視覚的表現を通じて、女性の「語り」と「沈黙」が共存する独自の詩的空間が形成されている。本発表では、ソネット連作 *Pamphilia to Amphilanthus* の語り手であり、散文ロマンス *The Countess of Montgomery's Urania* にも登場するパンフィリアの内面とその視覚的表現に注目し、ロウスが Obedience・Silence・Chastity といった当時の女性に求められた社会的規範のもとで、どのようにして主体的な表現のあり方を模索したのかを考察する。とりわけ、詩における「黒」や「暗闇」の視覚的イメージが、悲しみを象徴するだけでなく、感情をほのめかす両義的な装置として機能している点を分析する。また、*Urania* における詩を木に刻む行為や、衣服の刺繍、庭や迷宮といった視覚的・物質的要素は、内面の声を静かに浮かび上がらせる手段となっている。こうしたモチーフを通じて、ロウスが、女性が沈黙しながらも語ることをできる場を詩の中に築いていたことを明らかにしたい。

サタンの声は誰のものか ——『失樂園』における語りの拡散と消失

松村 祐香里（東京支部）

ジョン・ミルトンの叙事詩『失樂園』における語りの構造に着目し、サタンの語りがどのように他者に伝播し、最終的に語り手としての主体性を失っていくかという逆説的なプロセスを検討する。サタンは、まず地獄での演説において「天国で奴隷になるより、地獄で王になろう」と語り、反乱を正当化して墮天使たちを鼓舞する。また、誘惑の言葉によってイヴの認識を変化させ、神に背かせる。彼女もまたその語りを自分自身の経験として語り直し、アダムへと連鎖的に伝えていく。このように『失樂園』では、語りが拡散しながら他者を変化させる一方で、その過程において語りの起源は忘却され、語り手の主体性は空洞化していく。さらに、神による罰によって、サタンは言葉そのものを失い、語り手としての地位を剥奪される。本発表では、誘惑の語り・模倣・伝播といった要素を通して、『失樂園』が叙事詩における語りの力とその限界をいかに批判的に書いているかを明らかにする。

シェイクスピアのソネット集とベン・ジョンソンの『エピシーン』における沈黙

藤澤 博康（関西支部）

シェイクスピアのソネット集は1609年に四つ折り版が出版された。また、この年、あるいは翌年には、ベン・ジョンソンの『エピシーン、あるいはもの言わぬ女』も上演されたとされている。沈黙を主要なテーマに含む、これらの作品がほぼ同時期に出版、あるいは上演されたという事実はたんなる偶然にしては興味深い。

シェイクスピアのソネット集のいくつかのソネットでは、華やかな修辞を駆使して「若者」を賛美するライヴァル詩人（たち）とは対照的に、詩人は「若者」の崇高なる美德を、沈黙をもって逆説的に称賛しようとする。それに対して、ジョンソンは『エピシーン』で主人公モロースの病的な騒音嫌悪、そして沈黙への執着を、滑稽なほどまでに風刺的に描いている。

同時代のライヴァルでもあった、これら二人の作家が扱う沈黙はなぜこれほどまでに異なっているのだろうか。本発表では、作家が表現の自由を抑圧されて沈黙を強いられざるをえなかった当時の時代背景、両テキストでの両性具有的な「若者」/少年俳優に年長者が翻弄される姿、シェイクスピアとジョンソンのライヴァル関係に注目しながら、両作家の描き出す沈黙について考察を行う。

2025 年度総会総次第（16 時 30 分～17 時 00 分）

【報告事項】

1. 各支部活動報告
2. 編集委員会報告
3. 2024 年度会計報告（資料は当日配布）
4. 2024 年度総会決議による規約の修正報告
5. 会長・事務局交代報告
6. 次期会長挨拶
7. その他

【審議事項】

1. 日本学術会議協力学術研究団体加盟・オンラインジャーナルについて
2. その他

懇親会のお知らせ

日時：2025 年 9 月 14 日（日）18 時 00 分～20 時 00 分

場所：TFU Cafeteria Olive（大会会場 1 階）

仙台市宮城野区榴岡 2-5-26 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス 1F Tel: 022-762-7827

参加費：5,000 円

懇親会出席のご希望は **8 月 27 日（水）** まで各支部事務局にご連絡ください。

* 本部事務局：金崎 八重

* 本部会計：友田 奈津子

* 東北支部事務局：川田 潤

* 東京支部事務局：伊澤 高志

* 関西支部事務局：西野 友一郎

* 学会ホームページ委員：柴田 尚子